

「そうや、茶碗も鉢も……」

「ア、驚^{びつり}した、すんでの事で此着物を破つて仕舞ふ處やつた、次良はん御親切に大きに憚りさん、マア一服お喫^{あが}り」

「アレ一寸風向が變つて來た、今見て來たんやで姐貴」

「次良はん好い加減に惑亂^{ぐわらん}しときなアレや、そら世間の人は色々な事を云ひますやろう、常やん處の婢は愀氣深いか焼餅焼やとか云はれてますやろう、是が昨日^{きのふ}とか一昨日^{おそひ}とかなら妾も眞實^{ほんじつ}にしますが、今の今やなんて阿呆らしい、貴郎惑亂^{ぐわらん}が下手や」

「姐貴仲々豪いな一遍は怒つて見たけども、じつくり持直して私が歸つた後で愀氣をしよと思ふて、其れでは焼つきが持になるがな」

「何がやね」

「これは此方の事、けども姐貴今見て來たんやで」

「何を云ふてゝやね次良はん、宅の常はんは奥で寝てゝやがな」

「エ、ー ウダ／＼云ひなや姐貴そんな事があるもんか現在今私が見て來たんやないか」

「そんな事がおますかいな、奥で寝てゝやがな」

「ア、ゝゝ、大きな聲でワア／＼と喧^{やう}ましい何を云ふてるのぢや、馬鹿奴、オイ次良貴」

「ア、常やんか、フツ／＼フツ……」

「何がフツ／＼ぢや」

「常はん、次良はんが來て妾を捕へて惑亂をしてやのんで」

「馬鹿、お前へは黙つて居れ、オイ次良貴、友達と云ふ者は甚い親切なもんやな、オイ其様な仕様むない惑亂は措いて呉れ、然うやのうても他人の愀氣でゝも瘦^やせる位いな焼餅やきや、ひきよう俺が宅に居たならこそ宣いが、若し俺が居なんたら何様^{どなた}な間違ひが出来てるや解らんで、宅の婢は腹が立つたら我家でも火を付け兼ねんで、仕様むない事を焚^き付て呉れな、サアもう是れからは途中で逢ふても言葉も掛けて呉れな、友達^{ともだち}の交際^{かいざい}は今日限りぢや、然う思ふて居て呉れ」

「一寸常やん待つてんか、そないに云はれると甚い私がつらひ、私は如何考へても不思議で堪らん、私起きてるか」

「起きて居いでかいな」

「併し世の中に似た人も有るが、こないに能う似た人を見た事がない、着物から貰入まで同じ事や、マア聞いて、今私が師匠處へ行くと誰やら家中らで話聲が聞こへるのんで格子の間から覗いて見たらばお師匠はんと差向ひで一杯飲んでる男が常やんやね、怒りなや、それで此處へ出て來て此様な事を姐貴に云ふたんやが、別に惑亂でも何でもないね」

「次良貴、私が宅で寝てるのに師匠の處で居る譯がないやないか」